

令和4年度第3回滋賀県総合教育会議の結果について

1. 会議概要

日 時：令和4年11月11日(金)10:00～12:00

場 所：県庁北新館5-A会議室（一部出席者はオンライン会議システムを活用）

出席者：三日月知事、大杉副知事、福永教育長、土井委員、岡崎委員、窪田委員、
野村委員、石井委員

ゲスト：栗東市立葉山東小学校 校長 好士崎 壯
近江八幡市立八幡中学校 校長 楠本 茂樹
教諭 柳内 祐樹

議 題(1)次期「滋賀の教育大綱」について

⇒ 次期「滋賀の教育大綱」の骨子案について協議を行った。

(2)子どもと教職員の笑顔あふれる学校づくりについて

⇒ 本県のこれまでの取組の概要に関する事務局の説明、現場の取組に関する
ゲスト発表を踏まえ、取組の方向性について、意見交換を行った。

ゲスト発表の概要
<p>①栗東市立葉山東小学校</p> <p>小学校専科指導（教科担任制）加配教員の配置校。3年生以上で教科担任制を行うとともに、学年担任制により、一部の教科について複数の教員が授業を行う交換授業や、特定の曜日等に担任が入れ替わる交流指導を実施している。</p> <p>(成果)</p> <ul style="list-style-type: none">・事務量の減少に伴う児童対応時間の確保・授業準備の合理化や教科専門性の向上・複数の職員で子どもの様子を把握・共有することによる、生徒指導事案への早期対応・早期解決
<p>②近江八幡市立八幡中学校</p> <p>生徒の声(授業評価アンケート)を出発点に、教員が教科横断的なグループを作り、授業改善、人材育成、働き方改革を同時に推進し、教職員の働きがいを再構築する取組を展開している。</p> <p>(成果)</p> <ul style="list-style-type: none">・授業評価アンケートによる教員のモチベーション向上・グループOJTによる授業改善・生徒の声による教員の働きがいの向上

意見交換の概要

・「働きやすさ」を高めながら、授業改善等、教職員の「やりがい」につながる取組を推進していくために、教員・学校・教育委員会がそれぞれの役割の中で行うべき具体的な取組等について意見交換を行った。



2. 会議の結果

議題(1)の協議結果等

(1) 基本目標、サブテーマ、全体的な方向性について

- ①「全体的な方向性」に掲げる4項目をどのように整理して、一つのストーリーとしてまとめるのか考えていくべき。4項目には「相手」と「自分」、そして一人ひとりと全体の「幸せ」の要素があり、どのようにつなげていくのかが大事。(委員)
- ②愛は、不易流行の観点からも最も大事な価値観。友達への思い遣りとか、心を作る素晴らしさとか、基本的な人間関係を形成する資質を育むことで、社会に出ても人間関係を育んでいける。(委員)
- ③子どもたちが家族など相手と思い合って育つことは微笑ましく、家族や地域の方々などに感謝が伝えられるような子どもを育てるべき。「全体的な方向性」に示すように、まずは相手を知ること、思い遣ることからしっかり教育していくべき。(委員)
- ④自尊感情とも関連するが、まずは、自分に対する愛が大事ではないか。自分に愛情を持ってないと、人に愛情を向けることは難しいのではないか。(知事)

(2) 各施策について

- ①困難を抱える子どもたちの自尊感情を育むに当たっては、サポートのシステムにロールモデルとなる人材に参画いただき、子どもたちとの対話などを通じて、困難を抱えながらも社会でしっかりと役割を担っている姿を見せることが重要である。(委員)

- ②運動をする子としない子の二極化は由々しき課題であり、教育的観点から、体を動かす喜びをどのように経験させていくかが大事になっている。(委員)
- ③ESGの流れも踏まえ、子どもたちの視野の拡大などに資するよう、企業等との連携を積極的に展開してほしい。(委員)
- ④「部活動の適切な運営」はもう少し補足した方がよいのではないか。(委員)
- ⑤幼稚園等から小学校、中学校と接続されて、すくすくと育てていくことが大事であり、就学前の教育を重点的に進めてほしい。(委員)
- ⑥地域全体で就学前から家庭の事情を見ていけるような、誰一人取り残されない教育に重点的に取り組むのがよい。(委員)
- ⑦困難を抱える子どもたちを含めた、学びの基盤をどのように支え、学校のあり方をどのように考えていくのかという視点が重要。(委員)
- ⑧計画内容の実現を図るに当たり、市町ごとの濃淡や課題解決力の差を県としてしっかり捉え、支援に取り組んでいくのか考えていく必要がある。モデル事業も、事例集が市町や学校の足腰を強くするために活用されたか見直すだけで違ってくる。市町、福祉分野等も含めていく“巻き込み力”や、授業づくりの面から見直しを図ることも大事。(副知事)
- ⑨家庭の教育力は大事だが、あまり強調するとしんどい世帯もあると思う。滋賀県らしく、包み込むような言い方ややり方があるとよい。(知事)

議題(2)における主な意見等

(1) 小学校における教科担任制等の導入による働きやすさを高める取組に関する意見

- ①教科担任制や学年担任制を実践することにより、子どもと教員の両方にとって風通しの良い学校づくりに繋がる。またこの体制で児童理解が進むことは、今後の小学校教育のあり方を見直すポイントになる。(副知事、委員、ゲスト)
- ②小学校ではこれまで担任が担ってきた役割が大きい。担任でなければ対応できない部分を変えていくことが課題である。(ゲスト)
- ③保護者にとっては、担任が連絡帳を見て返事を書いてくれることで安心感がある。子どもと学校をつなぐ部分であり、負担は大きいですが、学年担任制を導入した場合でも丁寧に対応いただきたい。(委員)

④教科担任制の導入に当たっては、時間割等の調整が難しいため、適正な規模での実施や人の保障が必要である。(ゲスト)

⑤教科担任制については、教科によって負担に偏りがある点が課題である。また新任の教員が特定の教科を全く受け持たない点は、人材育成の観点からも検討が必要である。(教育長、ゲスト)

(2) 生徒の声を出発点とした授業改善・人材育成・働き方改革の取組に関する意見

①上司が理解を示した上で、部下に自由に仕事を任せることは、信頼感ややりがいにつながる。誰もが意見が言いやすく、職場内に活発なコミュニケーションが取れる状況を実現していくためには、良好なマネジメントが必要である。(委員)

②取組を継続するうえでは、本来の目的が忘れられ、形骸化してしまうことが課題である。教員一人ひとりが学校経営を自分事として捉え、効果的な取組ができるよう、現状維持でなく、常に工夫を続けていくことが大事である。(教育長、ゲスト)

③校内の取組においては、責任者を毎年交代させて多くの教員に経験させる等、人材育成の一環として位置付けることが重要である。(ゲスト)

④現職の教員が学び続ける機会が大事である。教職大学院や様々な研修で学ぶことは教員にとって財産であり、大きな力の蓄えになる。そこで学んだ教員がいることで、その学校が変わる要因になり得る。(教育長、ゲスト)

⑤教員が研修に参加するに当たって、児童生徒に負担をかけず、学校現場がしっかりと対応できる体制を整えることが必要である。(教育長)

⑥協働関係を構築して、生徒の声を出発点とした授業改善に取り組むことは、教員のやりがいや役割を基礎づけていく上で重要であり、また、自分の得意分野を生かすことができる点で効率的である。ただし、協働関係を築くうえでは、自分と異なる者を理解することが難しい点が課題であるほか、自分の苦手なことに対しては消極的になりがちであるため、コンプレックスを抱えこまずに、他者の前で晒しても安心して協働できる環境をつくることが重要である。(委員)

⑦新たな取組を進めるに当たっては、雰囲気づくりを行い、話し合いの中心となるキーパーソンの存在が重要である。様々な研修等を通じてキーパーソンを育てていく過程が重要である。(知事)